あらためて、報告書を読むと、親として学校関係者、先輩とその保護者を一生許すことはできない。特に、校長[redacted]の行為（当時から現在に至るまでのいじめの隠蔽、転学の妨害の手紙や電話等）は、教育者としてだけでなく人として絶対に許されないものだ。[redacted]の貴重な高校生活を返してほしい。[redacted]の大きな夢を返してほしい。[redacted]は、現在も同年代の集団の中に入ることができず苦しんでいる。校長[redacted]の感情的で愚かな判断が一人の人間の人生を、家族の人生を壊したことは間違いのない事実だ。

当時、[redacted]は、先輩やコーチ[redacted]から「しばく」「死ね」「消えろ」「いなくなれ」「やめろ」「くそ」などの暴言や集団での無視に耐えられず、[redacted]の寮から飛び出した。一晩先輩に軟禁されたが、部活の顧問や担任、学校側から一切保護者に連絡はなかった。もし、そのまま寮を飛び出して自死していたらと考えると今でも恐ろしい。

登校できなくなった[redacted]に対し、「いじめは許せない」と言っていたカウンセリング担当の先生が、ある時から「あれは、校長が言う通りいじめではない。」と言い始めた。[redacted]は、先生不信になった。「学校に自分を守ってくれる人はいない」と言ったときの[redacted]の涙は、親として耐え難いものだった。

寮から緊急搬送された同級生や数人の一年生がいじめの被害を訴えたことで、緊急の保護者説明会が開かれたが、校長[redacted]は一切いじめを認めることはなかった。親としても信じられない説明の連続で学校不信になった。顧問やコーチはおろか部活の先輩、保護者からも一切謝罪はなく、自分たちは何事もなかったかのように部活を続け大会に参加していた。先輩やその保護者に対して、私自身も人間不信になった。

保護者説明会の後、校長[redacted]と話をする機会があった。その際、次のようなことを言われた。

「学校はいじめと認めると業務が忙しくなる。」「第３者委員会が入ると困る。」「だから、いじめとは認められない。」

教育者とは思えない発言は、衝撃的だったのを今でもよく覚えている。

夏休み終了後、[redacted]は先輩と会いたくないので寮からは登校できない。家から通わないと精神的に安定しない。そのため、登校するには[redacted]から[redacted]に通う方法しかなくなった。現実的には、３年間の登校は難しいと考え、学年主任に何度か転学の相談をした。しかし、残念ながらいじめを認めない学校側が[redacted]の転学を認めることはなかった。

最後に、校長[redacted]と話した際には次のようなことを言われた。

「まだ[redacted]部に籍がある。戻ってくれば留年させずに卒業させる。」

「カリキュラムは２，３年生でどうにでもなる。」

「私学は、どこでも簡単に転学させてくれるのに、どうして認めてくれないんだろう。」

「私学は、転学を断る際は、面倒なのでカリキュラムと言って断る。」

「３月まで学校に来て単位をとれば転学ができる。」

「[redacted]さんは、こどもだから、幼いから、心が弱いから、今回のことはいじめではない」

この言葉を聞いて、私学の大きな闇を感じ、最終的に自主退学を選択するしかなかった。

[redacted]が、自主退学をした後、学校から今回の件についての説明が届いた。そこには今まで一度も校長[redacted]から聞いたこともない言葉が並んでいた。

「一部をいじめと認める。」

「引き抜き行為があった。」

自主退学した後に一部をいじめと認め、転学の妨害を引き抜きとする校長[redacted]の説明には正直驚いた。退学した後のこの説明は、自分たちを守るための自己弁護であり、被害生徒や家族を陥れる悪意に満ちたものである。

今も親として、この学校に入学させてしまったことを心底後悔している。何一つ納得はしていないが、前を向いて頑張ろうとしている[redacted]を、これからも家族で力を合わせて支えていきたい。

令和６年５月１日

[redacted]